

百年ぶりの里帰り

—吉野山伝来の仏像と名古屋の篤志家—

当館学芸部主任研究員 山口隆介

当館では、このたび新たに寄託を受けた普賢菩薩坐像と不動明王及び二童子立像（ともに個人蔵）〔図1、2〕の公開が始まった。普賢菩薩像は威厳ある顔立ちや鎬立った衣文に平安時代初期の作風を残す十世紀末から十一世紀初め頃の作、不動明王像は抑揚のある肢体と、着衣の優美な彩色・截金文様が魅力的な十二世紀の作であり（二童子像は江戸時代）、なら仏像館の展示に彩りを添えることとなった。

両像の伝来はこれまで明らかでなかったが、日本美術院で仏像修理を担った新納忠之介が大正四年（一九一五）に吉野山の文化財を検分した記録（奈良県庁文書）に普



図2 不動明王及び二童子立像 個人蔵



図1 普賢菩薩坐像 個人蔵



図3 櫻本坊本堂内写真 当館蔵(中央の台上に普賢菩薩坐像がうつる)

賢菩薩像の写真が掲載され、また当館所蔵の日本美術院資料にも奈良・櫻本坊の本堂内に両像の姿がうつる写真があることから、ともに吉野山に伝わったと判明した。

明治時代初頭の神仏分離政策により吉野山では多くの堂舎が廃絶し、行き場を失ったおびただしい数の仏像が櫻本坊に集められ、大正時代まで護り伝えられていた〔図3〕。だが、大正八年（一九一九）に至って櫻本坊の存続と諸堂の修繕費調達のため、新納の仲介で名古屋の実業家・近藤友右衛門（二代 一八七四〜一九三八）に両像を含む七十体あまりの仏像が譲渡され、多額の寄付が納められた。友右衛門の父である初代友右衛門（一八三二〜一九〇四）は、「信濃屋」の屋号で綿糸商として躍進する傍ら、浄土真宗の説教・法話の道場「信道会館」を私財を投じて創立するなど、信心深い篤志家として知られていた。初代の信仰心は子息にも受け継がれ、櫻本坊の窮状に接して一役買って出たのである。

その後、友右衛門所蔵の両像は昭和十五年（一九四〇）に重要美術品に認定され、翌年に文部省国宝鑑査官丸尾彰三郎の取り成しで鎌倉国宝館に寄託された。当時の新聞記事には、「鎌倉国宝館に陳列されてある仏像類は主に鎌倉時代のものが多いので、見学者にも時代の異なるものとの美術的な比較が出来なかったのを遺憾とし、文部省国宝鑑定官丸尾彰三郎氏の斡旋で藤原時代の名作で重要美術に指定されたある木造普賢菩薩の坐像（二尺）と不動明王（三尺）及び二童子（せいたか童子から童子）が搬入され二十三日陳列された」とあり、大きな期待をもって鎌倉の地に迎えられたことがわかる。先の大戦が本格化した昭和十九年（一九四四）には、海軍が用意した移送用自動車で神奈川県津久井郡串川村（現在の相模原市緑区の一部）に疎開したこともあった。

戦後しばらくして鎌倉を離れると公開の機会はほとんどなくなったが、このたび縁あって当館に寄託される運びとなり、実に百年ぶりに奈良への里帰りが実現した。右衛門が譲り受けた多くの仏像は次第に散逸したようであり、両像以外で所在が確認できているのは阿弥陀如来坐像（イギリス、ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館）、男神坐像（大阪・今宮戎神社）、天部立像（個人蔵）などわずかである。今後の精査がまたれるが、ともあれ普賢菩薩像と不動明王及び二童子像が旅した百年の歳月に思いを馳せながら、里帰りの展示をお楽しみいただきたい。